

事例紹介



訪問看護ひかり在宅看取りの実際

訪問看護ひかり 田中千草

「医療処置の多い肝硬変末期の事例」

A氏 60歳代 女性 非代償性肝硬変による肝不全

【訪問看護導入までの経過】

2010年頃から肝硬変で治療中。2020年5月転倒し右大腿骨頸部骨折で入院。骨折以前はADL自立で家事もできていた。骨折後、肝不全増悪、高アンモニア血症、肝性脳症あり、末期肝硬変の状態。腎不全も進行。

予後不良
り訪問看
肝性脳症

**特別訪問看護指示書により2週間は医療保険での訪問。
その他は介護保険での訪問で対応**

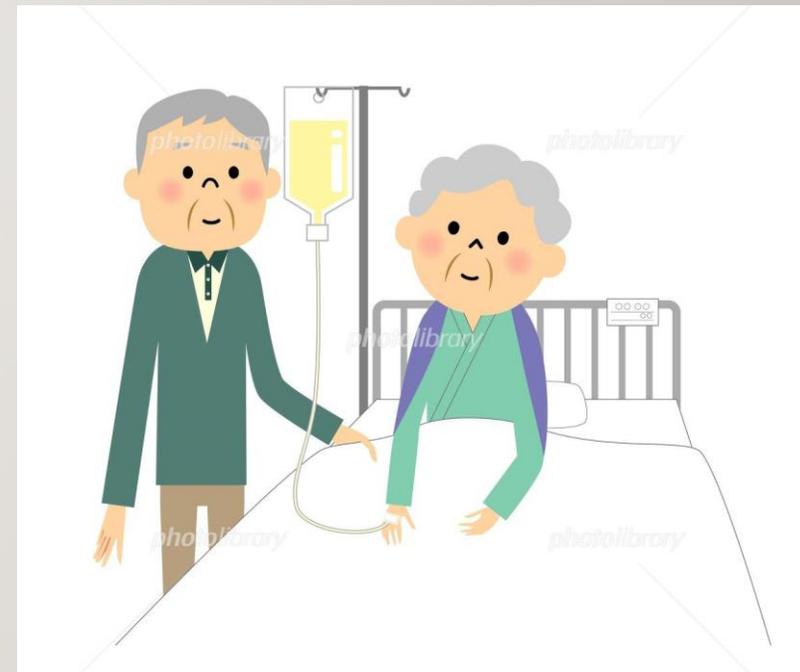
0年9月よ
-輸液、

「医療処置の多い肝硬変末期の事例」

A氏 60歳代 女性 非代償性肝硬変による肝不全

【導入時の身体的状態】

- ・ 介護保険要介護 5
- ・ 移動は車いす使用
- ・ 食事、口腔ケアは一部介助。
- ・ 排泄、入浴、更衣全介助



※倦怠感強くほとんどベッド上で過ごしている。

「医療処置の多い肝硬変末期の事例」

A氏 60歳代 女性 非代償性肝硬変による肝不全

【精神的・社会的状態】

- ・ 本人は家に帰りたいたいと思っているが、**100%**不安がある
- ・ 夫と息子の**3人**暮らし。主な介護者は夫。
- ・ 夫は本人が帰りたいたいと言っていたのでタイミングを待っていた
介護はできる限り自分でしようと思うが分からないことばかり
なのでいろいろ教えてもらいたい。



CVポート管理

持続点滴管理



薬物管理



看護の実際



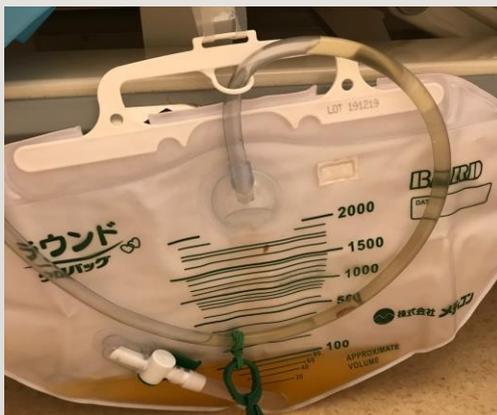
体調管理



排便コントロール



家族支援



**膀胱留置カテーテル
管理**



連絡調整

「医療処置の多い肝硬変末期の事例」

A氏 60歳代 女性 非代償性肝硬変による肝不全

退院後しばらくは発熱、尿路感染や腹水貯留などで再入院となることが多かったが、本人は病院嫌いで毎回早期に自宅へ戻った。夫に対する依存強く毎日一緒にいる夫の疲労が溜まることもあった。

→夫の介護負担軽減のため、1日2回のヘルパー介入、数か月間は月1回のレスパイトを利用しながら生活。



「医療処置の多い肝硬変末期の事例」

A氏 60歳代 女性 非代償性肝硬変による肝不全

退院当初、長期の在宅療養は困難で在宅看取りも難しいと予測されたが、夫も適度な手の抜き方を覚え本人の依存にもうまく対応できるようになっていった。

→徐々に病状悪化、体力低下あり。病院受診困難となり本人、ご家族と相談して2021年8月より在宅医に変更し定期的に往診を受けながら過ごした。最期は肝性脳症悪化によりせん妄状態となりドルミカムの持続皮下注射を開始。大好きな夫に見守られ穏やかに最期の時を迎えた。



「介護者の不安が大きかった事例」

B氏 70歳代 女性 肺癌末期状態

【導入時の身体的状態】

- ・ 介護保険要介護 I
- ・ 歩行自立でできるが筋力低下によりふらつきあり
- ・ 排泄、食事、更衣、整容自立
- ・ 入浴（シャワー浴）一部介助

※労作時の息切れや呼吸困難感により手助けが必要な部分あり。

「介護者の不安が大きかった事例」

B氏 70歳代 女性 肺癌末期状態

【精神的・社会的状況】

- ・ 本人は**2**か月前まで仕事をしていた。
- ・ 介護保険サービスや訪問診療などサポート体制を整え自宅で生活したい
- ・ 夫と離婚。長男と二人暮らし。子どもは**3**人いるが、長女は夫が癌。
次女は体が弱い。キーパーソンは同居の長男で仕事の休暇をとっている。
- ・ キーパーソンの長男は姉たちには負担をかけたくないという思いあり。
長女には病名のみ伝えており詳細を言わず。次女には病名も伝えていない。

「介護者の不安が大きかった事例」

B氏 70歳代 女性 肺癌末期状態

【初回訪問時の本人の状況】

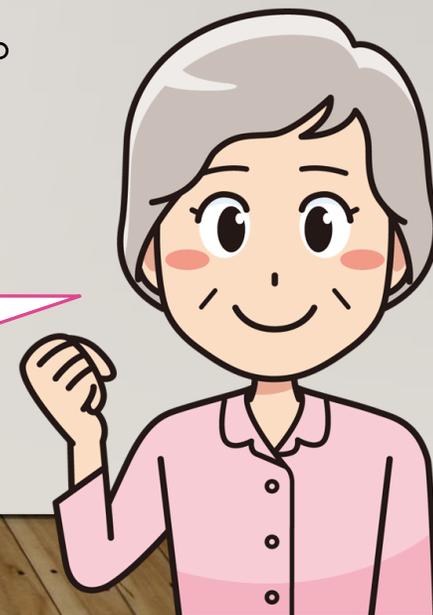
会話時に息切れあり。喘鳴聴取。呼吸困難感ありほとんど臥床して過ごしている。

左肩甲骨周囲に疼痛ありロキソニンでコントロールしている。

夜間になると**38**度台の発熱あり。カロナールを屯用で服用している。

自身の病状をしっかり理解し前向きに生活している様子。

治療はできないから、家で好きなことをして過ごしたほうがいいと思った。痛みや苦しさができるだけなくなり、できるだけ長い間ここにいたい。



「介護者の不安が大きかった事例」

B氏 70歳代 女性 肺癌末期状態

【初回訪問時の長男の状況】

料理、掃除、洗濯など家のことは全て長男が担っている。

介護保険のサービスや訪問診療、訪問看護についてわからないことが多く説明に対して苛立つ様子もある。

緩和ケア病棟に申し込みもしているが、それは保険だと思っている。できるだけ家で過ごせるようにしたいと思っている。仕事は10月から復帰したい。



体調管理

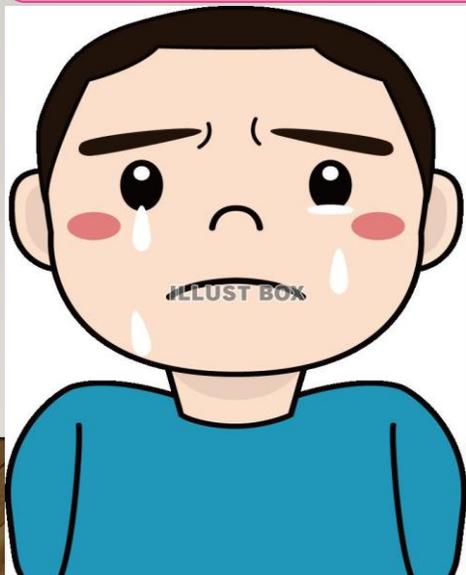


傾聴

シャワー浴介助

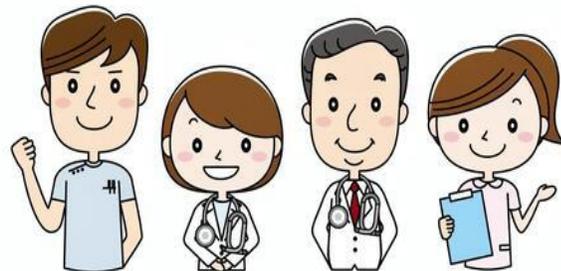


家族支援



看護の実際

連絡調整



薬物管理



酸素管理



「介護者の不安が大きかった事例」

B氏 70歳代 女性 肺癌末期状態

【家族支援】

発熱や、食欲不振、疼痛、SPO2の低下など本人の状態に対してとても神経質になっており不調があると「早く言え」「熱は3回測れ」「苦しくないわけない」など本人に強くあたることあり。看護師に対しても「なんでこうなるん！！」「もっと分かりやすく説明してくれ！！」「辛い姿は見たくない！！」など苛立ちを見せることが多かった。

→全てのことを1人で抱えており疲労や不安が大きいのだろうと考え、看護師の訪問時には休息をとってもらう、しっかり話を聴く、これから起こる可能性のあることや対処方法などできるだけわかりやすく説明するように関わった。

「介護者の不安が大きかった事例」

B氏 70歳代 女性 肺癌末期状態

自宅での介護はやっぱり不安
分からないことばかりやし。
でも後悔したくないからできる
ことをやっていくしかない。
でも挫けそう。心が折れそう

...

自分がいるから酸素が下がるの
かも。食事をせっかく作って食
べないと腹が立つ。そして怒っ
てしまって悲しくなる...

(どんどん状態が悪くなっていくこと)
覚悟するしかない。自分から緩和に行け
とは言わん。本人が行きたいと言えば連れ
れていくけど多分家にいたいだろうから
いさせてあげたい。

- ・不安なことはいつでも言ってい
いと伝える
- ・お母さんには怒らないように伝える
- ・呼吸についてはSPO2の数値より本
人の感覚を大切にするように伝える
- ・できる限り辛くないように医師と協
力してケアしていくことを伝える



「介護者の不安が大きかった事例」

B氏 70歳代 女性 肺癌末期状態

本人も家族もできる限り痛みや苦しさがないようにしてほしいという希望があった。

→医療用麻薬（オプソ）の使用、酸素量の調整などを行い、必要時は主治医へ相談し安楽に過ごせるようにケアを実施した。最期は呼吸困難の増強、死前喘鳴あり。ドルミカム使用で落ち着き、息子に見守られ眠るように最期の時を迎えた。



ご清聴
ありがとうございます
ございました

